

平ひらひら伝

其の二

源氏軍をなぎ倒すの巻



芳一の耳を持ち帰ったあの夜以来、琵琶亡靈「鎧」の平曲の噂は、あちらの墓、こちらの古寺の平家の亡靈仲間に広がつていつた。むろん、その語りのうまさではなく、被害に関する噂だ。

実際、あれを聞いた亡靈たちは、鬼火が湿気て三日間火がつかなかつたり、ガマガエルの声を聞いただけでまたアレかと怯えて体が震えたり、亡靈なのに夜が怖くて外に出られなくなるといつた心的外傷に悩まされていた。

そもそも亡靈は肉体を持たず、現世への未練やら恨みやら、言うなれば、とつくに死んでいるくせに「死にたくない！」という氣力だけで存在しているだけのものであるため、心的外傷はまさに、致命的な物理的外傷であつた。亡靈でいるための氣力を失つた亡靈は、そのまま消え去るか、靈界の重力によつて地獄に引き落とされてしまうかのどちらかだ。亡靈にとつて精神的ダメージは、己の存在そのものを脅かす一大事なのであつた。



当の本人は、そうとは知らず、あの夜から妙に調子がつき、方々の平家の墓や、ゆかりの古戦場を渡り歩く慰問ツアーに出ていた。あの翌晩、鎧が疲れ切つて寝ている間に、全員が揃つて墓から引っ越してしまったのだが、自分の語りにまったく疑問を持たない鎧は、あまりの素晴らしさに感動した亡靈たちの魂が浄化され、極楽浄土に召されたのだと勝手に思い込んでしまった。そこで自分の語りで各地の平家の亡靈を癒やしてやろうと余計なことを思いつき、旅に出たというわけだ。

鎧の語りの脅威についてまだ聞かされていない墓では、普段から退屈している亡靈たちが喜んで鎧を受け入れ、氣の毒なことにまともに聞いてしまうから、甚大な被害を被るといった具合だ。

現世では、とっくの昔に片が付いている源平の戦いだが、死後の世界では今もずっと続いていて、各地の古戦場では、ほぼ毎夜、源平合戦の三連戦が繰り広げられている。むしろ、生きる目的も死ぬ心配もない亡靈たちには、それしかやることがない。それだけに、鎧の語りは亡靈平家軍の存亡につながる大問題でもあつた。

そこで、緊急に対策を講じなければと、亡靈平家緊急災害対策会議が招集され、

専門家が知恵を出し合つた。鎧をひつ捕まえて琵琶を没収すれば早そうなものだが、そこはお上品な平家の亡靈。どうにかもめ事にせず、穩便に済ませたい。となれば、とりあえずは専守防衛だ。もし鎧が「びよーん」を始めたら、一、衣服の乱れを整えて肌の露出を少なくし、二、音源に向かつて正座をして身を安定させ、三、両手を伸ばして上半身を前に倒してできるだけ体勢を低くし、四、両腕で両耳を挟んでなるべく聞かないようにすること、という正しい耐衝撃姿勢を通達するしかなかつた。

これが鎧本人から見ると、全員がこちらを向いて平伏した状態に見える。当然、何も知らない鎧は、「そんな私の語りがあるたいのか」と勘違いをする。耐衝撃姿勢のおかげで、無事に鎧の語りによる打撃を最小限に抑えられた亡靈たちは、終了後、みなが肩を抱き合つて無事を祝い涙した。何も知らない鎧は、「そんなに感動したか」といい気になる。そのため、鎧の語りはますます猛威を振るようになつていつたのだ。

さらに困ったことに、平家の一般亡靈たちは、なるべく事を荒立てないように、鎧を「先生」と持ち上げるものだから、ま



すます調子に乗る。それまでは、ふらりと現れて道端でびよーんと琵琶を鳴らしては人々を恐怖のどん底に陥れていた鎧だが、偉くなつたもので、「何月何日、○○無縁墓地会館にて平曲リサイタル」などと公演の予定を知らせるようになつた。しかしこれによつて、鎧の針路と被害予測が読めることとなり、亡靈たちにとつては有りがたかつた。

こんなことがあつた。公演予定が知らされたある墓地では、去年から予定していた平家亡靈会の旅行の予定と重なつたと言ひ訳して、当日、全員で墓から避難した。鎧が意気揚々と到着してみると、知らせてあつたにも関わらず誰もいない。みんなを喜ばせてやろうと来てやつたのに、歓迎のかの字すらない。見れば墓の奥でひとりの亡靈が平伏している。留守役の亡靈だという。

「先生のご公演を賜るというこの上なき幸運に恵まれ、亡靈一同大変に喜んだのですが、年に一度の旅行に重なつてしまいまして、急いで宿のキャンセルを申し込んだのですが、直前とのことゆえキャンセルがかなわず、全員、先生の語りが聞けないのは残念でならぬと後ろ髪を引かれる思いで出発いたしました次第でして、無礼を承知で厚かましいお願ひをいたしますが、先生にはぜひまたの機会にお越しいただけたらと……」

そう聞かされた鎧ははたと膝を叩き、「ならばこうしよう。その宿へ拙者が赴き、宴会で語ろうではないか。みなには内緒にしておき、スペシャルゲストとして登場するのだ。緞帳は下げたまま、何の前触れもなく拙者の語りが始まる。みなは何事かと舞台を見る。そこで幕がしずしづと開いて拙者が登場というわけだ。どうだ、みな喜ぶぞ！」と提案した。

「と、とんでもない！ それでは身が守れませぬ」

「どういう意味だ？」

困り果てた留守役は、咄嗟にこう言い訳した。

「じつを申しますと、先生は連日の語りでお疲れのようで、その大切な喉にもしものことがあつては平家一門の損失。そこで我ら一計を案じまして、先生がお気兼ねなくお休みいただけるよう、こちらの勝手で都合が悪くなつたなどと申したのであります」

これを聞いて氣をよくした鎧は、せめてもの礼にと、その留守役に対して個人的に語りを聞かせるという暴挙



に出た。うろたえた留守役は耐衝撃姿勢を取るまもなく、近くにあつた地面の穴に飛び込んだが、それは亡靈を落とし込むために靈界の各地に鬼たちが掘つてあつた地獄への落とし穴だつた。近くで留守役からの連絡を待つていた亡靈たちは、いつまでたつても連絡が来ないので心配になり、みなで墓に戻つてきたところを鎧と出くわしてしまつた。鎧はみんなの心遣いに対して礼をしたいと、普段以上の力を込めていきなりびよーんと始めたからたまらない。その墓は一瞬にして壊滅してしまつた。

そんな惨事が重なり、再び、亡靈平家緊急災害対策会議が招集された。
「なんとか穩便にアレを止めさせられないものかのう」と全員が頭を抱えるなか、一人が妙案を思いついた。

「いやいや、見方を変えれば、あれは強力な秘密兵器でござる」

その言葉に全員が顔をあげた。

「あやつの平曲を源氏の軍勢にぶつけるのでござるよ」

「だが、どうやつて源氏軍に聞かせたらよいのだ」

「合戦ばかりではつまらない、たまには芸術で競い合おうではないかということで、平家を代表する親善芸術大使として送り込むのでござる」

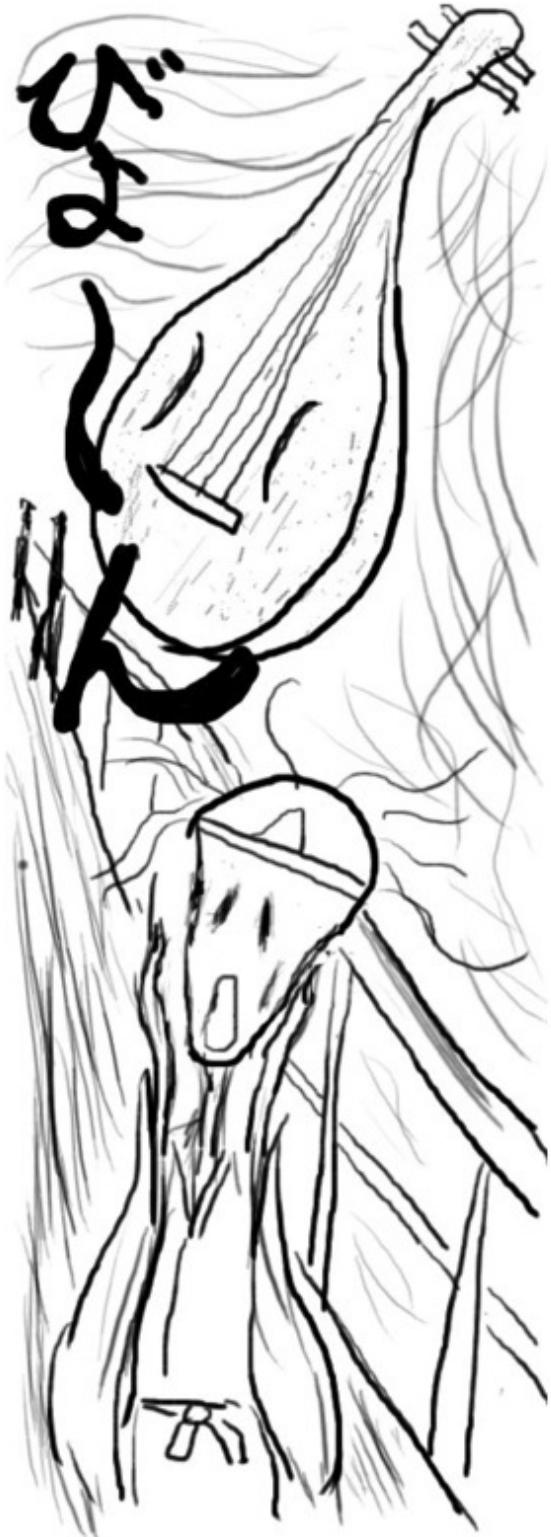
「いや、そのような奇襲は牛に火をつけて我が陣営に放つような野蛮な板東者どもの考えること。我ら平家としてはお下品にすぎませぬか」

「表向きは文化交流でござる。鎧もまつたくそのつもりで赴くのであるから、奇襲ではござらん。相手に甚大な被害が及ぶのは、あくまで聞く側の油断が招く結果」

「しかし、いかにバカの源氏とは言え、すぐに気づくであろう。あやつが捕らえられたらなんとする?」

「構わぬではないか。一石二鳥でござるよ」

「そりや妙案。ふおつふおつふおつ」



突然の大ブレイクで、名譽ある親善大使に任命されたと思い込んだ鎧は有頂天になり、まずは因縁の地、深夜の六波羅に現れた。さすがに源平ゆかりの史跡とあって、双方、有名無名の亡靈武者たちが毎夜集まつては合戦を繰り返している。当然、応援団やら見学の亡靈もさらに多く集まり、合戦のスター亡靈たちを取り囲んで鐘や太鼓で声援を送っている。

この夜は、まだ両陣営が対峙して、互いの様子を窺っているときだつた。その張り詰めた空氣の中、平家軍の中から突然現れたのが、「源平友好」「歌は友だち」と書かれた大きな幟を背中に2本立て、琵琶を持った鎧だつた。

驚いたのは味方の平家軍と平家側応援団だつた。いきなり現れた鎧に大いにうろたえたが、そこは訓練が行き届いているので、みな一斉に、鎧に向かつて耐衝撃姿勢をとる。これには源氏の軍勢も驚いた。全員がこの幟の男に平伏している。しかも、敵陣の中心では平清盛も同様に平伏しているではないか。どんなに偉いヤツが現れたのか。それが源氏の陣営まで歩み出てきたから、源氏軍は身を固くした。

「源氏のみなさま、平家一門を代表して、日ごろのお付き合いの感謝を込めつつ、平曲をお楽しみいただきたく参上つかまつってございます。今宵はたっぷり、語らせていただきますゆえ、存分にご堪能くだされ！」

ありや何だ？ 敵陣で自軍の負け戦の物語を語ると
は、よほどの人物か馬鹿かのどちらかだ。しかし、そん
な馬鹿になぜ平家の連中は平伏すのだ？ やはりめちゃ
くちゃ偉い人物なのではなかいか。しかし結局、平家は
みな馬鹿だから馬鹿の親玉に平伏すのだと、未体験の危
機に直面した源氏の軍勢は正常化バイアスがバッヂリカ
かつた結論を出してしまつた。

そこへいきなり「びよーん」と琵琶の音。「ぶわっほ
ん、がつほん、げほげほ、あーあー」と不気味な发声練
習に続き、「ぐえんずいのつはものどむあー！ すーでー
にふえいくえの……」と始まつたからひとたまりもない。
いきなり煙をかけられた蜂の巣の蜂のように、上へ下へ
の大騒ぎ。逃げようにも腰が抜けてその場を動けず、鎧
の口から飛び出す黒板を伸びた爪で引っ掻きながら脇の
下をくすぐられるような不快極まりない音波の塊が、慌
てふためく源氏側亡靈たちをちぎつては投げちぎつては
投げ、名だたる武将たちをもばつたばつたとなぎ倒して



いつた。

ひとしきり語ると、源氏陣営に動く者はいなくなつた。語りが終わつたことに気づいた平家の群衆は、身を起こしてやんやの喝采を贈る。それを聞いて鎧は平家側に振り向き手を振るが、その瞬間、平家の亡靈たちは耐衝撃姿勢に戻る。鎧は悦に入る。

ところが、源氏軍の中から元気な声が聞こえてきた。

「おい、お前」と若々しく力強い男の声だ。振り向くと、若武者風の男がしつかりとした足取りで、やはりダメージをひとつも受けていらない従者を従えて鎧に近づいてきた。鎧は自分の語りを聞いて平然としている者と初めて出会つたので驚いた。

「そなたも、お供の方も、それがしの語りを聞いて何も感じられませぬか」

「別に」と男はぞんざいに言い放つた。

源義平の胴、団



「みな感動のあまり身動きが取れなくなるのが常であるが」と、あたりを見回すと、もう誰もいない。この隙に全員が避難してしまったのだ。はてな、と思う間もなく男が言った。

「あいにく、オレには首がない」

見ればなるほど首がない。供にも首がない。

「首がないから耳もない。そんなわけで、音を直接体に感じることがないから無事なんだな」

「無事とは?」

鎧はまだ、自分の語りが人々に危害を与えていて気がついていない。

「申し遅れた。オレは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が長子、鎌倉ノ悪源太義平だ」と男が名乗った。

「おお! お噂に名高い源太義平様でありましたか。お顔がわかりませんで、大変に失礼を申した」

「あたりまえだ、首がないんだから。気にするな」

源義平と言えば、鎌倉の悪源太として知られる人物だ。関東出身の暴れ者で、六波羅で平家軍に捕らえられ首を斬られている。そのときの太刀取り、難波経房

源義平の首、因



に、義平は「うまく斬れ。下手くそに斬ったなら、お前がしゃつ首に食い付くぞ」と言つた。「首を斬られてどうやつて食い付くのだ」と聞かれた義平は、「今喰らい付こうと言うのではない、いつか必ず雷となつて蹴り殺してやろうぞ」と答えた。その数年後、平清盛の供で攝津に赴いた難波經房は、実際に雷に打たれて死んだという伝説が残つてゐる。

「その、お前がさつきからおやつてるびよんつての、すげえ威力だな。その妖術をオレにも教えてくれ」

「おつしやる意味がよくわからんが」

「雷は派手なわりに一発勝負なところがあつて、あんまり実用的じゃねーんだよ。その点、お前のそれは大量破壊

兵器として効率がいい」

「あいや、これは平家物語でござるが」

「おいおい、いくらオレが無教養な板東者だからといって、平家物語かそうでないかぐらいはわかる。いい加減なことを言うとドカンとやるぞ！」

「め、めつそうもない。これはれつきとした正統派の平曲でござつて……」

「まあなんでもいい。そのびよくんの術をオレに教えてくれ」

「平曲でござるが……、まあよろしい。それではまず、琵琶をばこのように構えて……」

鎧は義平に琵琶と撥を持たせて弾かせてみた。だが初めてのことなので、どうにも音が出ない。

ペんぺん。

「ああ、だめだめ。そうではござらん。もつと地の底から響くように」と鎧は琵琶を受け取り、びょんと弾いた。

すると遠くで逃げ遅れた源氏の武将がぎやつと言つて地面に倒れ込んだ。

「あ、わかつたわかつた、こうだな」と義平は琵琶を奪い取り、べろーんと鳴らす。「ぜんぜんダメでござる」

「なにを、このやろう！」

「先生とお呼びなさい」

「わかつたよ、センセー。だから、こう構えて、こうか？」
ぴよいーん。

「そうじやなくて、こう！」

びよーん、と鳴ると、また遠くで数人が悲鳴をあげて倒れる。

「はい、やってみる」

ぴよーん。

「ああ、違う違う。こう！」

びよーん。

「むずかしいな。こうか？」

びよーん。

「あー、ダメダメ！ さつき教えたでしょ！」

このやりとりをずっと眺めていた供の者は、退屈して地面に座り込んだ。

「なにをやっているのやら。大将の物好きに付き合わされて、ただ待つてることの身にもなってほしいね。これじゃ、退屈で退屈で……」と供の者はびよーんと大きな伸びをした。

「おお、お連れさんのほうが筋がいい！」

かくして源氏の大スター鎌倉の悪源太源義平の自尊心をくじき、かつ大勢の源氏の亡靈に多大な心的外傷を与え、意氣揚々と帰還した鎧は、その功績を仕方なく認められて、平家の亡靈が集まっているところからうーんと離れた場所に領地を拝領。おまけに運の悪い家来もあてがわれ、亡靈界の一国一城の主となつたのでありましたとさ。



平ひらひら伝 源氏軍をなぎ倒すの巻

<http://p.booklog.jp/book/58976>

著者：金井哲夫

絵：中川善史

文豪堂

<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58976>

ブログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58976>

電子書籍プラットフォーム：ブログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブログ